「女神さまっ」の平穏な日々　～リンド編・パート２　その１～

TSUTOMU-CHAN

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
「女神さまっ」の平穏な日々　～リンド編・パート２　その１～

【Ｎコード】
Ｎ７３３６Ｚ

【作者名】
ＴＳＵＴＯＭＵ－ＣＨＡＮ

【あらすじ】
あらためて言うことはありません。夏にしたためた「平穏な日々シリーズ」の続編です。趣旨に変わりは無いので、できれば、温かい目で読んで頂ければ、と思います。ご感想をお待ちしております。

（前書き）

あらためて、言うことはありません。夏にしたためた「平穏な日々シリーズ」の続編です。趣旨に変わりはありませんので、願わくば、温かい目で読んで頂ければ、と思います。ご感想をお待ちしております。

Ｓｃｅｎｅ　１　天上界・首都にて

ここ天上界においても屈指の実力を誇る「ワルキューレの中のワルキューレ」であるリンドの朝は、かなり早い。さすがに、トレーニングそのものは勤務時間内に済ませることをモットーとしているために、早朝からご近所を騒がせるような激しい行動は控えているものの、勤務開始からベストの体調で望める様に、日課である朝の散歩を欠かすことはない。この散歩を通して本日の体調の把握につとめるとともに、散歩後に少し熱めのシャワーを浴びることで、頭の働きの活性化も図るのである。

既に、多くのワルキューレを束ねる管理職にあるリンドにとっては、緊急出動に応じて真っ先に現場に駆けつけることは殆どあり得ないのだが、身に着けた習性はなかなか抜けるものではない、と本人は思っている。逆に、親友であるミストなどからは「貧乏性を通り越して、趣味の粋に達した”ワーカーホリック”でしょ。」と切り落とされている。この件については、親友の弁のほうが正しいとの評価が一般的であるが、リンド本人は、自身が正しいと思っている。周囲としても、別に誰かの迷惑になる話でもないために、特段に騒ぎ立てるほどの話題であるとも思っていない。

むしろ、今、リンドの周囲で話題になっていることは、彼女のベッドサイドの小机に飾られている一枚の写真の方である。リンドが毎朝・毎夜の挨拶を欠かすことが無い「この写真」の存在が、何故に周囲に知られてしまったかについて、ここでは詳細を語ることはしないが、とにかく、「あの堅物リンド」が「ある人間の男の子の写真」をベッドサイドに飾り、朝に夜に「挨拶をしている」ことは、少なからず衝撃をもって受け止められている。もっとも、この「衝撃」は、彼女の僚友や上司達からは圧倒的な好意を持って捉えられ

ている。曰く、「あのリンドも、ようやく女の子として目覚めてきたのね。」ということである。ただ、ある事情を承知している直属の上司や親友のミストなどからは、「相手が、あのベルダンディーの・・・」ということが後々に大きな問題にならなければ良いが、との心配も囁かれている。

ちなみに、リンド本人は、このことが周囲に漏れていることに全く気がついていない。

さて、今日も日課である散歩とシャワーを済ませたリンドは、いつもの様に「電車」に乗って勤務するオフィスへと出勤した。当然のごとく、その途上において、多くの男性神から求愛の言葉をかけられたが、それをいつもの通りに無視してきたことも、もはや日課と呼べるものであった。

彼女がオフィスに入り、いつもの戦闘服に装いをあらため、執務席に着いて昨夜の当直であったワルキューレからの報告書を読み始めたときに、デスクの電話が鳴り始めた。実は、この電話こそが、ここから語られる「リンドにとっての一大事」の始まりとなったのである。

電話をかけてきたのは、リンドが所属する部局のナンバー2ともいえる局次長からであった。

「おはよう、リンド。これから直ぐに私のオフィスに来てもらえるかしら。」

この様な出勤当初に彼女からの呼び出しを受けることは初めてと言えることであったので、リンドとしては珍しく少々戸惑った様子であったが、そこはさすがに平静を取り戻して直ちに回答した。

「5分後には、伺います。」

「わかったわ。それでは、待っているわね。」

電話での会話は、事ほど左様にあっさりと終わってしまったが、リンドの胸中は穏やかではなく、様々な思いを巡らせていた。特に心配になったことは『最近、職務上のミスがあったか？』ということであった。彼女の記憶においては、少なくとも、局次長自らに詰問される様な事があった記憶は全く無い。さりとて、有能で思いやりのある女神として上司・同僚・部下から信頼され慕われる彼女が、意味も無く自分を呼び出すことも考えられなかった。

ちなみに、リンド自身も、彼女を深く尊敬している。そんな彼女からの呼び出しであるがゆえに、リンドは、彼女のオフィスに向かうまでの間、あれこれと考えることを止めることができなかった。

そういう心理状態であったために、彼女のオフィスの前に立ったときには少しの躊躇があった。が、思い直した様に、リンドはてきぱきとした動作で部屋のドアをノックした。

「リンドです。お呼びにより参りました。」

「あらっ、早かったわね。どうぞ、入ってちょうだい。」

比較的のんびりとした返事を受けて、リンドは素早くオフィスの中に体を滑り込ませた。

部屋に入って正面を見ると、相変わらず、輝かんばかりの美しさと高貴な威厳を同居させた局次長が、珍しく少し困った様な顔をして微笑んでいた。

「よく来てくれたわね、リンド。そこに座ってちょうだい。」

勧められるままにソファセットの椅子に着こうとすると、そこには、リンドの直属の上司である課長の姿があった。彼女もまた、歴々たる経歴の持ち主であり、リンドが尊敬する上司の一人である。また、その美貌も天上界屈指といわれるほどであり、あまたの幹部神から熱烈なプロポーズがなされていると聞くが、それに応じたそぶりは欠片も見せない。そんな彼女も、今朝に限って、リンドを見たときに少し困った様な微笑を見せた。

そんな上司達の素振りが少し気になったリンドではあったが、勧めに応じて、課長の横のソファに腰を落ち着けた。それを確認する

と、局次長は、課長とリンドの両者が座る正面のソファに優雅に腰掛けた。
　これほどの美神が3人も揃えば、これはもはや「一枚の絵」とも言える情景であり、写真週刊誌あたりのフォーカスの対象としても十分に使えるものであるが、凛とした3者の雰囲気が、その様な下世話な考えを芽生えさせることさえ打ち消していた。
　それにしても、いつもの局次長であれば、冗談のひとつも話しながら、巧みに職務の状況などを聞いてくれるのであるが、今日に限って、なかなか口を開いてくれない。また、隣に座る課長も陽気な性格なので、朝の挨拶を欠かすようなタイプではないのだが、いまだに黙っている。
　リンドは、堪えかねて、自ら言葉を発した。
「失礼ですが、次長、何のご指示があるのでしょうか。」
　その言葉を聞いて、局次長はあらためて困ったような微笑を浮かべて切り出した。
「うん、実は、仕事のことではないのよ。あなたのプライベートに係わること。」
「私の、プライベートですか？」
「そう。実は、とても言いにくいことなの。昨夜、私が幹部神が集まる比較的大きなパーティに出席したことは、貴女も承知しているでしょ。」
　そう言えば、昨日、局次長が早めに退庁する旨の通知が来ていたことをリンドは思い出していた。
「その席でね、あるとても高位の幹部神からお話があったのよ。『実は、私は前々から貴女の部下であるリンド君に惚れ込んでいてね。この度、決意を固めたのだよ。是非、彼女を私の側室に迎えたいと。このことは、私の妻も認めている。でね、君からこのことを彼女に伝えるとともに、便宜も図って欲しいのだよ。』とね。私もね、あまりにも急でビックリするとともに、とても身勝手な話だと思ったのよ。だってそうでしょ。これじゃあ、まるで女性神がだれかの

持ち物みたいな扱いじゃない。だから、言ってやったのよ『残念でしたね。リンドには既に意中の人が居るみたいですよ。そのお話は無かったことにした方がよろしいのではないですか。』とね。」

あまりにも唐突な内容の話であったために、不覚にも、リンドは目を丸くしたままに固まってしまっていた。そんな彼女の様子を確かめつつ、局次長は話を続けた。

「私としては、相手も立場があることだし、この一言でお話はおしまい、のつもりだったのよ・・・。」

と、いつもはテキパキと部下に指示を伝えてあらゆる事態に適切に対処する彼女にしては、歯切れの悪い様子で、次の言葉を続けた。

「ところが、あの男、よほど貴女のことに執心していたようね。『ああ、そのことなら知っているよ。そもそも、その男は人間で、しかも、あのベルダンディーの想い人だそうじゃないか。それなら、別にリンド君が私のところに来ることの障害にはならないだろう。それでも、彼女がこだわるのなら、私にも考えがあるよ。そもそも、ベルダンディーにリンド、更には、ウルドにペイオースまでもが惚れ込んでいる人間が存在することが、多くの男性神にどの様に思われているのか、考えてみたことがあるかい？特に私が何も言わなくとも、彼には消えてもらいたいと思っている若い男性神は多く居ると思うけどね。』と言ったのよ。さすがの私も唖然とするとともに、少し背筋が冷たくなったわね。」

「それは、蛍一君を消滅させる、という意味にしか取れないのですが・・・。」

事の重大さをかみ締めるように、リンドが局次長に確認した。

「まさしく、その通り。どうやら、私の言葉が彼を痛く刺激した様で、この結果を招いたことは貴女やベルダンディーに本当に申し訳ないとしか言い様がありません。心の底からお詫びします。」

そう言うと、局次長はリンドに対して深々と頭を下げた。尊敬する上司からの謝罪に戸惑うリンドは、何も言うことはできなかった。しかし、地上界に居る彼女の”生涯の友”に危険が迫っていること

だけははっきりと理解できた。このままではいけない。と思ったリンドの横で、局次長の言葉を引き取り、課長が初めて口を開いた。
「あなたも気付いている通り、我々女神にとって”未来への希望”として見守ってきたふたり、特に、森里蛍一君に大変な危機が襲い掛かるかもしれません。昨夜のうちに女神総長にご連絡したところ、『その様な暴挙は、決して許されるものではありません。構いません。人間界に対する過干渉の未遂事件として、私の名において、本人はおろか、その同調者も拘束しなさい。全ての責任は私が取ります。』とのお言葉がありましたので、殆どの危険分子は拘束し、監視をつけました。」
その言葉を聞いて、少々安堵したリンドではあったが、一息をついた課長は、更に言葉を続けた。
「ただ、残念ながら、3人の若い男性神が既に地上界に降りてしまった様なのです。しかも、彼らはそれぞれにベルダンディー、貴女、そしてウルドに対して狂信的な想いを抱いており、森里君を亡き者とすることに執心しているらしのです。」
この言葉を聞き、リンドが決然とした態度で言葉を発した。
「局次長、課長、私に地上界への降臨のご許可を！」
リンドのこの言葉を予想していたかの様に、局次長が威厳を湛えた態度で話を引き取った。
「リンド、許可ではありません。命令です。1級神特務限定リンドは、直ちに地上界の他力本願寺に赴き、森里蛍一君の警護にあたること。この命令は、次に新たな命令が下されるまで、永劫に継続するものである。質問は？」
「ありません！」
「では、直ちに出発せよ。なお、この件に関しては、既に地上界滞在のベルダンディー、ウルド、スクルドには伝えてあります。3者と良く協力して、任務の完遂を図ること。」
「了解しました。では、出発します。」
「武運を祈る。」

この言葉を聞くや否や、リンドは驚くべき速度をもってゲートに向かって飛び出していた。

残された二人の上司は、しばらくリンドの行方を見守っていたが、やがて、どちらからともなく会話を始めた。

「リンドにベルダンディー、ウルドなら間違いなく大丈夫とは思います。ただ、最後に仰られた『永劫に継続・・・』については、何か含みがある様に思えるのですが・・・。」

「あらっ、気がついていたの？そうね、私も、あの3人が本気で臨めば、3人のやんちゃな若い男性神から森里君を守ることについてはあまり心配していないのよ。ただね、たまにはリンドにも”ご褒美”をあげたいと思っているの。これは、その伏線よ。」

どうやら女神とは言え、高官ともなると、色々としたたかな様である。

Ｓｃｅｎｅ　２　人間界・他力本願寺

全速力で人間界に向かったリンドではあったが、その間にも心の中で蛍一の無事を祈りながら、胸が押しつぶされる想いが渦巻いていた。途中、事情を承知していたゲートから、

「蛍一を絶対に守るの。約束するの。でないと、帰りにはここを通さないの。ちなみに、ヤツ等は正規のルートを通っていないから、かなり消耗しているはずなの。貴方達が負けるはずないの。」

との力強い激励の言葉を受け取りながらも、彼女の生涯で最も焦りを感じていた。

［ベルダンディーとウルドが居るのだから、絶対に大丈夫だ・・・。］

と思いつつも、

［相手は、どんな卑劣な手段を使ってくるかも知れない。とにかく、蛍一君の無事を確認したい。］

との想いは強くなるばかりである。
いつもなら、風に吹かれた羽毛が降りるように静かに地上に降り立つリンドであったが、このときは、まさに「突き刺さるように」地面に降り立つや否や、他力本願寺の母屋にある「みんなのティールーム」に飛び込んだ。
「蛍一君は無事か！！」
叫ぶように言葉を発したリンドは、直ぐに室内を見渡した。が、彼女の緊迫した雰囲気を受け流すように、いつものちゃぶ台を前に正座したベルダンディーがいつも通りの笑顔で迎えた。
「いらっしゃい、リンド。事情は局次長から伺っていますよ。まず、座って。お茶をどうぞ。」
「ベルダンディー、その様にのんびりしている場合ではないのだぞ！それよりも、蛍一君は無事なのか？そもそも、彼は何処に居る？」
そう叫ぶリンドの横から、落ち着いた声で話しかけたのは、蛍一、まさにその人であった。
「落ち着いて、リンド。俺はここに居るから。大体の事情は、ベルダンディーから聞いているよ。それにしても、リンドに対して失礼だよな。俺なんかが、君の恋人と間違われるなんてさ。」
その言葉を聞いて、唖然として蛍一を振り返ったリンドであったが、いつもの彼の人懐っこい笑顔を見て、少し安心するとともに、はにかんだ様子で言葉を紡いだ。
「いや、失礼なんて、そんなことはないのだが・・・」
この様子をじっと見ていたウルドは、心の中で呟いていた。
［ホント、ケーイチは鈍いんだから。これじゃあ、ベルダンディーとの自然な進展なんか当分は期待できそうもないわね。本気で、一服盛ってやろうかしら。］
「それにね、安心して、リンド。天上界からは既に3人に関するデータは届いているから、姉さんが対応策も考えてくれているのよ。」

「居場所も既に掴んでいるわよ。このスクルド様にかかれば、馬鹿な男性神の隠れ場所を探知するなんて、造作もないことなんだから。」
「それだけのことがわかっていて、何故、君達は先制攻撃を仕掛けないんだ？事は、蛍一君の命に係わる事なんだぞ！」
「だからこそ、よ、リンド。こちらから仕掛けて万が一に一人でも打ち漏らした場合には、こういう単細胞な輩は、やけくそになって何をするかわからないでしょ。あわてることはないわよ。放っておいても向こうからここに来る。実力はこちらが上、地の利もある、負けることなど１００％ありえない。」
「だから、何故、向こうから来るとわかるのだ？」
「貴女、本当に男のことをわかってないわね。いい、自信過剰の坊や達の第一の目的は、ケーイチを亡き者にすること。でも、彼らはそれだけでは満足しない。次の目的は、私達を連れ去り、我が物とすること。その両方の目的を満たすためには、私達が動かない限り、ここを襲うしかないのよ。」
「頂いたデータからは、彼等の個々が、３人の誰を狙ってくるかも判っています。協力されると、少し面倒になるので、少し挑発して、それぞれの責任で各個に撃破しちゃいましょう。その方が、彼等にとっても、良い薬になるでしょうから。」
「あら、ベルダンディーにしては、珍しく厳しいことを言うじゃない。」
「姉さん、これでも私はかなり怒っているのですよ。私の”蛍一さん”の命を狙うなんて言語道断です。その上、リンドをどうにかしようなんて輩に同調して我が欲望を達成しようなんて・・・。女神を侮るのにもほどがあります。」
　このとき、ベルダンディーの背後に燃え立つオーラを見て、リンドとウルドですら恐ろしくて寒気を感じていた。
「ま、まあ、作戦も決まったことだし、慌ててもしかたないわね。スクルド、奴等の監視は任せても大丈夫？」

「侮らないでよ。シーグルが２４時間体制でモニタリングを欠かさないし、バンペイ君も戦闘モードで待機しているわ。奴等が不意打ちしてきたとしても、十分に対応できるわよ。」
「じゃ、もう遅いから、みんな、寝ましょうよ。念のため、ここの周辺には私が結界を張っておくわね。ベルダンディーは、万が一の時に備えて、シーグルの横で休んでくれるかしら。」
ここで、ウルドは言葉を切り、悪戯っぽく微笑んで続けた。
「でさ、リンドは、ケーイチと一緒の布団で寝てくれる？本当の万が一に備えるためには、そうした方が良いと思うんだけど？」
この言葉を聞いて、蛍一とリンドは、まさに天地が引っ繰り返った様な驚きを見せた。両者ともに顔を真っ赤にして叫んでいた。
「なんで！？」
「いいじゃん、別に。”生涯の友”が一緒に寝ることに、何の問題があるのよ？」
「そうですね、そうすれば、蛍一さんも絶対に安全ですよね。」
「あ、あのね、ベルダンディー、そういう問題じゃ無いと思うんだけど・・・。それに、リンドだって、困ってるし。ねえ、リンド。」
このとき、下を向いて何事かを呟いていたリンドが、小さな声で応えた。
「け、蛍一君さえ良いのならば、私は別に構わないぞ。そもそも、そのための任務で降臨してきたのだし・・・」
「さすが、任務第一優先のリンドよね。そうと決まれば、二人はケーイチの部屋に行って休みなさい。いいこと、ケーイチの身の安全を図るためにも、必ず一緒の布団に入るのよ。後で、確認に行くからね。」
このような経緯を経て、リンドと蛍一は、一つ布団で寝ることになったのである。

Ｓｃｅｎｅ　３　他力本願寺内「森里屋敷」

リンドは、戸惑っていた。どうして、あのようなことを言ってしまったのだろうか、と。確かに、蛍一を守ることは、局次長から示された絶対的な命令であり、その完遂のためには、何でもする。しかしながら、心のどこかに、別の感情が芽生えていたことも確かである、と。『蛍一君の布団で一緒に寝る。』リンドとて、それなりの年齢に達した女性である。下心が無いとはいえ、そのことが、色々な可能性を秘めていることも承知している。ベルダンディーの存在もある。それでもなお、ウルドの言葉に応じてしまった自分が居ることを認めざるを得ない。ただ・・・

あれこれと迷ううちに、何か吹っ切れた様な気がしてきた。もしかしたら、これは自分の気持ちに整理をつける良い機会かもしれない。蛍一に対する感情が、性別を超えた深い友情の延長線上にあるものなのか、それとも、別のもの・・・「女性としてのもの」なのか。今まで、一度も表したことの無い「女性としての自分」で彼に接してみて、”感性で見極める”のも一つの方法ではないか。

そう考えると、リンドの行動は素早かった。自ら蛍一の布団を整えると、少しもじもじしながらも、自分から布団の半分に潜り込んでしまった。

「蛍一君、夜も遅い。敵はいつ来るやもしれないのだから、休めるときに休んでおくぞ。」

その言葉を言ってみて、初めて、自分が詭弁を使うことができることに驚くリンドであった。

「う、うん・・・」

そう言うと、蛍一は、本当に恥ずかしそうに、布団の端っこに入り込んできた。

「蛍一君、それでは君を完全に警護できない。少し恥ずかしいが、失礼するぞ。」

そう言ってリンドは、蛍一を前に向かせて、布団の真ん中で正面から抱きしめるようにした。

「〜〜〜！！！」
声も発することができないほど驚いた蛍一は、真っ赤になったが、それは、行動を起こしたリンドも同様であった。
「・・・・・・」
「・・・・・・」
両者とも、しばらくは黙り込んでしまっていたが、先に口を開いたのは蛍一であった。
「あ、あの、リンド、本当にありがとう。これほどに俺の心配をしてくれるなんて、とても嬉しいよ。」
「任務だから、当然だ。で、でも、こうしていると私もとても安らぎを覚える。なんと言うか、君の香りに包まれていると、とても安心できる。そう、幼いころ、父親の布団に潜り込んだのと同じ感覚だ。」
「そ、それなら、良いのだけれど。それでね、こうしてても少し恥ずかしいし、良ければ、リンドの天上界での生活の様子なんかを話してくれないかな。」
「私の？」
「そう。何か、興味があるというか、リンドのことをもっと知りたい言うか・・・」
「君がそう言うなら・・・。でも、ウルドなどの話と比べると、きっとつまらない内容だと思うぞ。」
「そんなことないと思うよ。そもそも、君は、普段、何処で何をしているのかな？」
と、問われるままにあれこれと話をしていたリンドではあったが、いつの間にか、静かに寝息を立てて寝入ってしまっていた。そんなリンドを見て、微笑ましく感じていた蛍一も、また、直ぐに眠りに就いていた。

Ｓｃｅｎｅ　４　他力本願寺

翌朝、リンドが目覚めたときには、太陽が東の空に顔を出し、隣の蛍一は既に床を離れていた。そのことに気付かなかった自分に驚きを感じるとともに、相手が蛍一であるなら、と妙に自分を納得させるところもあった。ただ、一つ言えることは、これほどの安らぎをもって朝を迎えたことは、おそらく初めてであったと言うことである。その理由を考えて、リンドは、真っ赤になってしまった。

そのタイミングで、勢い良く襖を開けられたときには、不覚にも、心底驚いてしまった。

「おはよう、リンド。ベルダンディーが朝食を準備しているから、起きなさい。」

声の主はウルドであった。

「わかった。直ぐに行く。」

「でさ。夕べは、どうだったのよ？」

心底楽しそうに、悪戯っぽく微笑んでウルドが尋ねてきた。

「ど、どうって、ただ同じ布団に寝ただけだぞ。」

「そんなこと、判ってるわよ。あの蛍一が、何かをするわけないじゃん。それより、何を意識しているのよ。むしろ、何かをして欲しかったわけ？」

「な、な、な、何を言ってるんだ。そ、そ、そんなわけあるはずがない！」

「ところで、私の知っている限りでは、リンドがこれほどまでに安らかに寝入ってしまうなんてあまり聞いたことがないんだけど。蛍一の横、あなたにとっては、よっぽど安心できる居心地の良い場所なのね。」

「そ、それは・・・。（驚くほど小さな声で）否定しない。」

「ま、よかったじゃない。なら、貴女の”女としての結論”も出るかもしれないわね。」

と、まるでリンドの昨夜の決意を見透かすかの様にウルドが言った。

「とにかく、早く来なさい。少し、伝えることもあるから。」

身支度を整えて、「みんなのティールーム」にリンドが入った時には、既に朝食の用意が整い、皆が席に着いていた。
蛍一の「いただきます。」の声に合わせて食事を始めてから、おもむろにリンドが切り出した。
「ところで、奴等の動きはどうなっている？できれば、早めに決着をつけたいと思っているのだが。」
「あら、リンド、気付かなかったの？実は、奴等、昨晩の遅くにここを襲ってきたのよ。でも、殆ど、バンペイ君とシーグルに叩きのめされたところを、どちらかと言えば、私が助ける形で捕縛したのよ。で、そのまま、ゲートに預けると、めでたく天上界にご送還、となったわけ。だから、何の心配もいらないわよ。」
「ええ、リンドには申し訳ないと思ったけど、お客様だから、起こすのも悪いと思って・・・」
これを聞いて、リンドは驚くよりも呆れてしまっていた。
「貴女達は、いとも簡単にそう言うが、奴等とて1級神の端くれ。それなりに・・・」
「あら、それは、私達ノルン3姉妹を見くびっていない？そもそも、貴女の上司だって、このくらいの結果を予想していたはずよ。」
「う、だとすれば、私は何のためにここに来たのだ？」
「あら、私は、リンドが少し働きすぎなので、休暇をかねてこちらに来るから宜しく迎えてやってね、と局次長さんから聞いていたのだけれど・・・」
このとき、リンドはようやく気付いていた。これは、2人の上司が、ちょっとしたトラブルにかこつけて、自分を地上界に向かわせたのだと。リンドは、直ちに行動を起こした。
「電話をお借りする。」
言うや否や、リンドは玄関のダイヤル式電話の受話器を取り上げていた。
「1級神特務限定リンドだ。局次長をお願いする。」

交換が対応し、お待ち下さい、との言葉の後に、局次長が応えた。
「あら、リンド、朝が早いわね。何か問題でも？」
「問題も何も無いです。それより、局次長、私をかつぎましたね？」
「あら、人聞きの悪い言い方ね。危険分子がそちらに行った事は事実だし、蛍一君や貴方達に危害を加えようとしたのも事実よ。ただ、彼等が思ったよりも情けなかっただけのことじゃない。」
「判りました。では、任務は終了したと理解します。それでは、ただいまから帰還します。」
「待ちなさい、リンド。私は、『次の命令を発するまでは、この命令は継続する。』と言いました。そして、現時点で、私は次の命令を発することはしません。従って、貴女は、引き続き森里蛍一君の警護を続けなさい。」
ここで、局次長は一息置くと、悪戯っぽい声で続けた。
「ウルドに聞いたわよ。夕べは、ずいぶんと良い思いをしたようね。いいこと、自分が”この男（ひと）”と思い込める相手にはなかなかめぐり合えないのだから、仮にベルダンディーがライバルでも、少しは自分を主張しても良いと思うわよ。いざとなれば、天上界は一夫多妻も認められるのだし。最も、彼の方が、モラルは高そうだから、難しい選択ではあるけどね。」
上司の言葉を、受話器を握りしめたまま、唖然として聞いているリンドであった。

【パート2（その2）に続く】

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7336z/

「女神さまっ」の平穏な日々　～リンド編・パート２　その１～

2011年12月24日11時48分発行